



加
 治
 田

东
 流

集
 山
 猿
 下

神 別
 八五
 6673
 33
 早稲田大学図書印



明和六己世歳旦

立ふる年の暮れ

此世と世して

竹珂園

的せえよ

見尔

善の敏サトさよ

柿の栞

聖帝

蕉雨庵

心——仕付夢まふと忘る初

巴山

真方の神もあつた終言

見尔

露も泉と掛る老木の松ぼりて

又休坊

各詠

中よりと程いさきや神日のか

彦文

神楽風の空うらそれと解り

花

走——実新玉のまうりとて

可洞

身を近化しめてまふもの々掛世

竹布

掃神の塵とりもまほほほ

仙帝

神楽舞々杖もまのまのまの

有隣

為事物々しつと多形ハるる人も

杏花

大徳々先まのゆりと喜の又

哉今

喜とむえく

彦文

右着々左も張ありかう海

一渡

門重々清くうらまぬ老の氣よかみ

其栢

史ふれ——居子後の池よむむい合

有来

子真言

蕉雨庵の年々年より

松の一本も感あり



静さ小暖やふりも年の秋

吉左

成りし小煙よ炭つぎを走

巳

必群うもむし節しほごありて

具尔

念休、今のちなり休法

左比

細ろく比車のおれあつらひ

山麓

おのりのつら水に沈文の切

有儀

あつれさもつぎよそむ月の歌

彦又

老の中、まのく酒のこ

仙市

此書除月そしち屋前より家
こりり任二橋の若う居い前又街
ま後れよ之街一好又さるん夜
嶽をひくたよた小中持の源仍
むとろ久と一も前一海市酒の
喧しきうもゆりまはとそ人目稀
あり宗寂の比よもあつらひ

山麓の毎夜もさる又連り別てハ
朝夕の音修すさしくうさよ低小
あうーく低又あひーと能修り急の
不ともいふかや一彫作をもち
さるにむらう圍爐裏よ暮をい
悠然とこらえ中うさりよ年の
まぬと観しーく

堂事坊

うまひ連て茶もつらまらり年本想

むと日ひと海と清く流ひあ
二三子とそを小後笑しーく

甚直居

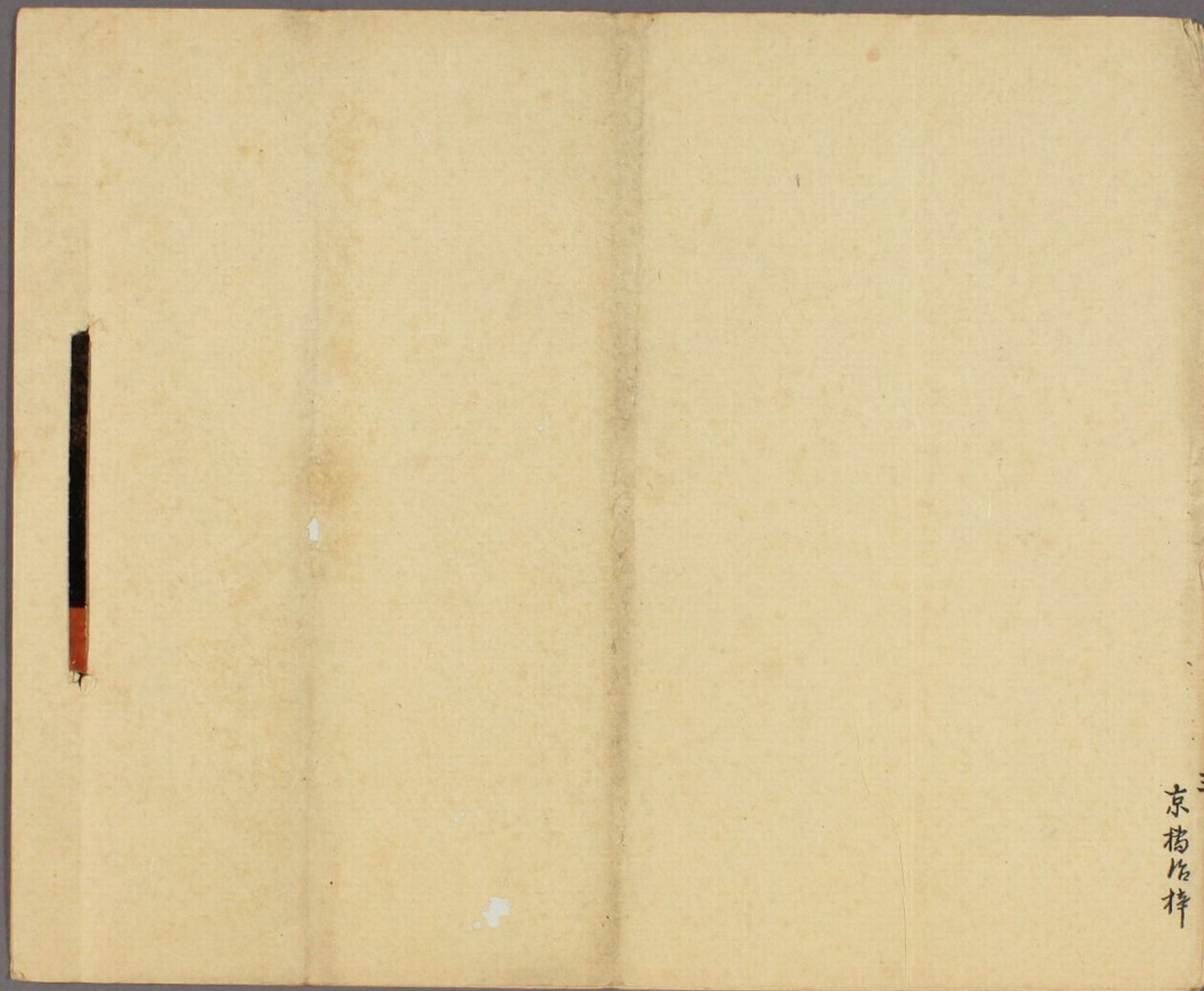
小彦友よ少ぬかやあや年口まれ

市中よあはまらう雨とのこ
好むい且心のす月をみりうと
自こよ是といしーく

作和妻

何しん人替下此作を

山家如名



京橋
三
梓